

ANTOINE DE SAINT-EXUPÉRY

Le Petit Prince

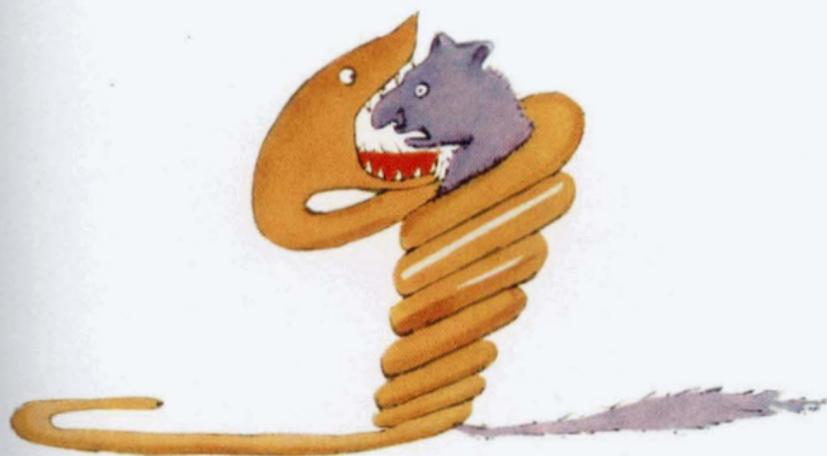
星の王子さま

サン=テグジュペリ作

内藤 濯訳



オリジナル版



I

六つするとき、原始林のことを書いた「ほんとうにあった話」という、本の中で、すばらしい絵を見たことがあります。それは、一ぴきのけものを、のみこもうとしている、ウワバミの絵でした。これが、その絵のうつしです。

その本には、「ウワバミというものは、そのえじきをかまずに、まるごと、ペロリとのみこむ。すると、もう動けなくなって、半年のあいだ、ねむっているが、そのあいだに、のみこんだけものが、腹のなかでこなれるのである」と書いてありました。



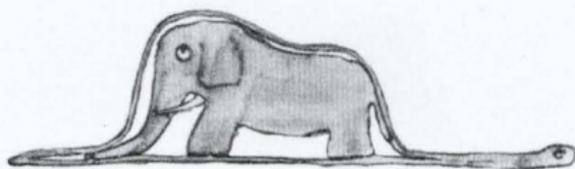
ぼくは、それを読んで、ジャングルのなかでは、いったい、どんなことがおこるのだろうと、いろいろ考えてみました。そして、そのあげく、こんどは、色エンピツで、ぼくのはじめての絵を、しゅびよくかきあげました。ぼくの絵の第一号です。それは、前のページのようなのでした。

ぼくは、鼻たかだかと、その絵をおとなの人たちに見せて、〈これ、こわくない？〉とききました。

すると、おとなの人たちは〈ぼうしが、なんでこわいものか〉といいました。

ぼくのかいたのは、ぼうしではありません。ゾウをこなしているウワバミの絵でした。おとなの人たちに、そういわれて、こんどは、これなら、なるほどとわかってくれるだろう、と思って、ウワバミのなかみをかいてみました。おとなの人ってものは、よくわけを話してやらないと、わからないのです。ぼくの第二号の絵は、下のようのでした。

すると、おとなの人たちは、外がわをかこうと、内がわをかこうと、ウワバミの絵なんかはやめにして、地理と歴



史と算数と文法に精をだしなさい、といました。ぼくが、六つのときに、絵かきになることを思いきったのは、そういうわけからでした。ほんとに、すばらしい仕事ですけれど、それでも、ふっつりとやめにしました。第一号の絵も、第二号の絵も、うまくゆかなかったので、ぼくは、がっかりしたのです。おとなの人たちときたら、じぶんたちだけでは、なに一つわからないのです。しじゅう、これはこうだと説明しなければならぬやうだと、子どもは、くたびれてしまうんですがね。

そこで、ぼくは、しかたなしに、べつに職をえらんで、飛行機そうじゅうの操縦をおぼえました。そして、世界じゅうを、たいいてい、どこも飛びあるきました。なるほど、地理は、たいいそうぼくの役にたちました。ぼくは、ひと目で、中国とアリゾナ州の見わけがつかしました。夜、どこを飛んでいるか、わからなくなるときなんか、そういう勉強は、たいへんためになります。

ぼくは、そんなことで、そうこうしているうちに、たくさんのえらい人たちと、あきるほど近づきになりました。思うぞんぶん、おとなたちのあいだで、暮らしました。おとなたちのようすを、すぐそばで見ました。でも、ぼくの考えは、たいしてかわりませんでした。

どうやらものわかりのよさそうな人に出くわすと、ぼくは、いつも手もとに持っている第一号の絵を、その人に見